＜前回＞西欧キリスト教世界の形成・補論

・類型論から見たキリスト教世界、ヘレニズムとヘブライズム

・「ゲルマン的なもの」の意義、北森嘉蔵『神の痛みの神学』

（１）ヨーロッパ文明の基盤―ヘレニズムとヘブライズム―

１．古代ギリシャ・ローマ文化（政治・経済・文芸）＋キリスト教（一神教）

これら二つの伝統・潮流の動的な相互作用の中から、「ヨーロッパ世界」が出現した。

＝　中世

↓

２．ヨーロッパをそれの基礎にある動向・潮流・伝統の多元性において捉えようとする議論。その一つとしての「ヘブライズムとヘレニズム」という図式。

その変形

・ルネサンスと宗教改革　　・キリスト教とヒューマニズム

トレルチ、アーノルド

５．「文化は宗教の形式(Form)であり、宗教は文化の内実(Gehalt)である。」（ティリッヒ「文化の神学」）

６．宗教１（文化の内実としての宗教）→ 宗教文化（宗教２）

↓　↑　協調・対立

→ 世俗文化

７．宗教と文化の二重の関係（あるいは、教会的キリスト教とキリスト教的文化）

（２）ハヤトロギアあるいはハヤ・オイントロギア

８．有賀鐵太郎の提唱した「ハヤトロギア」

「オントロギア」（存在論）については、これまでも古代ギリシャの思惟構造を意味するものとして広く取り上げられてきたが ── ハイデッガーはもちろんのこと ──、有賀は、聖書あるいは古代ヘブライ思想における、このオントロギアにも匹敵する基本的思惟構造を表現するために、ギリシャ語の「オン」に対応するヘブライ語の「ハーヤー」をもとに、「ハヤトロギア」という用語を造語した。

９．聖書的キリスト教的宗教と古代ギリシャ文化との出会い＝ハヤトロギアとオントロギアとの出会い。→　西洋キリスト教世界。西欧世界。

→　ハヤ・オントロギアという新しい思惟の成立

10. ハヤ・オントロギア：動的思惟構造、静的な構造体を常に突破するような動的関係体。「トノーシス」（緊張）。

11. ハヤ・オントロギア：抽象的な「思想」や「論理」といったものではなく、むしろ共同体の実践の場で機能する原理。

「カハル・エクレシア構造」として歴史的共同体的な構造として展開される。

12. ハヤ・オントロギア＝「ハヤトロギア的エクレシア構造」

→　「共同体を建設する力」としての「愛」（アガペー）の構造の問題へ。

14.「緊張」概念のキリスト教思想研究にとっての意義に関しては、水垣（2001）を参照いただきたい。また、ハヤトロギアとオントロギアとの関係性としての「緊張」は、量(1994)が、哲学と神学の関係を「緊張関係」と捉え、その構造と論理を論じていることからもわかるように、宗教哲学の基本的論理構造として一般化できる。

（３）「ゲルマン的なもの」の類型と北森神学

・北森嘉蔵(1916-1998)『神の痛みの神学』新教出版社，1946（講談社，1981）

16.「十一、神の痛みと福音史」
「神の真理が歴史といかに関係するかという重要な問題」(197)
「福音自身が歴史をもつことに外ならぬ」、「福音史とも呼ぶべき概念」(198)
「福音史には「時期の限」即ち時間的契機と「住居の界」即ち空間的契機とが含まれる。既にユダヤと異邦との対立も一方空間的対立であると共に、旧約時代と新約時代という時間的対立でもある。」
「ユダヤと異邦との対立に次いで、福音史の問題を原型的明確さにおいて提示するのは、ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会との対立である。」(199)
「ゼーベルクがいう如く、宗教改革は「ゲルマン的精神の理解におけるキリスト教」」「である。」「ヴェッセルによってではなくルターによって始めて宗教改革が成就されたのは、ルターにおいて始めて国民教会の形態が実現したからである。ここでもまたローマ対ゲルマン、中世対近世という空間的時間的対立が、福音史の契機をなしているのである。」「宗教改革はまさに福音史的出来事である。」(200)
「神学は結局神観に帰着する。神観について決定的なるものをもたらし得ない神学は、未だしといわねばならぬ。神観とは神の姿をいかに仰ぐかということである」、「神学の代表的発言は信条である。」
「ギリシャ・ローマ的教会」「ニカイヤ信条といわゆるアタナシウス信条」、「内在的三位一体という形において結晶している。」(201)
「「本質」という概念がすぐれてギリシャ的性格のものである」、「福音の歴史においてギリシャ的思惟の占める古典的な意義が存する。」
「一つの制限」「「本質」としての神はその性格において、聖書に示される神の真実の姿から一つの決定的なものを見失っている」、「エレミヤが見た痛みにおける神の姿」(203)
「ギリシャ的神学によってもゲルマン的神学によってもこの一歩は踏み切られていない」、「ルターが仰いだ神の姿に接しても」、「確かにここには恩寵への感覚が存在した。しかし未だ厳密に神の痛みとしての恩寵に対する感覚ではなかった。」(204)
「日本のこころ」「悲劇の精神」「つらさ」
「我々の主題たる神の痛みに最も深く呼応する」(209)
「普遍的な真理は日本を媒介とせずしては、現実とならなかったであろう。」(211)
17.「ゲルマン的＝ドイツ的」？
・古典的ローマとカトリック的ローマとの差異。
・「九、神の痛みと「隠されたる神」」
「正反対の相の下に」「隠されたる神は啓示の神である」(162)
「「神の義」も「信仰のみ」も結局「隠されたる神」という真理の展開」
「信仰とは隠されたる神を信じること」「隠されたる神は最も鋭くキリストにおいて自己を示す」(164)
「神の真実の怒を神の愛が負いこれを克服するという事実こそ、神の痛みにほかならぬ」(167)
「「隠されたる神」と神の痛みの相互連関」(168)
18.「聖書的思惟＋古典ギリシャ・ローマ的思惟＋「ゲルマン」」という図式は、西欧中世の構成の略図としては理解できる。しかし、「ゲルマン的」「西欧中世的」の内実については、個別的な事例に即した議論を集積する必要がある。
19. ハヤトロギア、神の痛みの神学は、いずれも、プログラム・プロジェクトである。

３．キリスト教修道制１

（1）修道的宗教性の普遍性とキリスト教修道制の起源

１．修道的な宗教生活は、キリスト教にかぎったものではなく、多くの宗教が共有する生き方、生き方の伝統である。孤独な超人的な修行（独居）と共同的な修行（共住）
↓
宗教学的（比較宗教学的）研究テーマ

２．ユダヤ教的伝統の再考：死海文書・クムラン教団(1947 年)の発見
祈り、禁欲、共同生活、善悪二元論的傾向（終末論、プラトニズム）という諸特徴。
洗礼者ヨハネの宗教集団
→ 初期キリスト教徒の関係、とくにエルサレム教会の使徒集団

３．フィロンの著作（『瞑想的な生活について』）より
エジプトのエッセネ派、テラペウタイ（治療者？）

４．禁欲（アスケーゼ）の積極的意義
「福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。あなたがたは知らないのですか。競技場で走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。あなたがたも賞を得るように走りなさい。競技をする人は皆、すべてに節制します。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするのですが、わたしたちは、朽ちない冠を得るために節制するのです。だから、わたしとしては、やみくもに走ったりしないし、空を打つような拳闘もしません。むしろ、自分の体を打ちたたいて服従させます。それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです。」（I コリント、9.23-27）

５．宗教的生の形態としての修道
・独居と共住（孤独と交わりの相補性）
ギリシャ語のモナコス（ラテン語の monachus から近代語へ）＝「独りで住む者」
ラテン語の anachoreta ＝「隠れ住む者」
ラテン語の eremita ＝「荒野に独り住む者」 → 独住者、隠修士
coinobion ＝「共同生活」（独住者の集団） → 共住、修道院
エジプトのパコミオス(292/4-346)
古代においては、様々な形の修道生活が現れ混乱が生じる。異端視される放浪修道士、アウトロー的存在。
シリアの頭柱行者シメオン(c.389-459)
・使徒的生活（via apostolica）の理想
キリストの福音を宣べ伝えるために、キリストのように清貧を尊び、使徒たちのように共同生活を営む。
・指導者のもとでの修養の意味：瞑想における異常心理（幻覚による精神錯乱）への対処。神と悪魔の「識別」の必要。経験者への相談。
Cf. 「異言」の場合：「異言を語る者は、それを解釈できるように祈りなさい」
（1 コリント 14:13）

６．「祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした。信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金

を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。」（使徒言行録 4.32-35）

７.「三世紀後半から四世紀初頭にかけてエジプトやシリアに出現し、その後地中海世界全域にわたって成立を見たキリスト教修道制は、古代末期を特徴づける社会現象の一つと言うことができる。」（戸田、2008、32）

「エジプトのキリスト教修道制の成立についてはマニ教の影響は認めがたい」、「筆者は、非キリスト教的要因から修道制の成立を論じるという姿勢に固執するつもりは毛頭ないが、しかし他方、単にキリスト教内的な要因からの説明だけで修道制の成立を論じるのは不十分だとも考えている。」（61）

（２）キリスト教修道制の歴史的展開――古代から中世へ

・現在の研究状況：キリスト教修道制と異端（たとえば、グノーシス主義）との関連。
正統と異端とを単純に分離することはできない。

・エジプト　→　東方教会（正教）　→　西方教会（カトリック）

７．エジプト

エジプトのアントニウス(251-356)：キリスト教修道制の父

修道士の理想的模範としてのアントニウスの禁欲的生活

世俗を離れ砂漠で修養する隠修士（禁欲的行者）の散在的集団

アタナシオス(296-373)の作と言われる『聖アントニウス伝』

→　アレイオス派の異端問題の文脈、アタナシオス神学との関連。

↓

隠修士的形態から共住生活へ（パコミオス）

共同生活の規律とそれに対する服従、清貧

修道制は、パレスチナ（４世紀のエルサレムは「聖地」となり、聖地巡礼が始まる。多くの修道院が建設。西方から、ヒエロニムスやルフィニウスらが訪れる)、シリア（シメオン）へ広がる。

８．東方修道制の伝統

カッパドキアのバシレイオス（-c.379、カエサリアの主教、カッパドキアの三教父の一人）：東方キリスト教の共住修道制の基礎を築く。三つの会則。

９．西方への修道制の展開

(1)アウグスティヌス

『カトリック教会の道徳』（創文社）

『アウグスティヌス会則』の「第二会則」における労働の規定（cf.「第三会則」）

労働重視の思想：労働することを欲しない修道志願者に対して、労働の有益性を説く（『修道士の労働について』）。

祈り、説教、学問などに集中するために、労働の義務を免除されており、托鉢で食べ物を得るのが当然との論理（労働しない権利）に対して。パウロの模範。怠惰な放浪修道士の偽善的生活などによって、アフリカ管区における修道士の労働倫理は危機的状況であった。

(2)アイルランド、学者の島

５世紀におけるパトリック（アイルランドの守護聖人）のアイルランド伝道。

↓

６世紀より、修道制の発展。厳しい修行と学問の愛好。

ペレグリナティオ（異郷滞在、異郷遍歴）：修道院長が修道院を突然譲り渡して、行き先も告げずに遠国に旅立つなどのパターン。魂の救いのために新しい故郷を求めるという贖罪的な意味を伴った禁欲的動機に基づく行為。

コルンバヌス（-615）のガリア伝道

『修道士規定』『共住生活規定』：アイルランド同様に厳格な会則。

↓

７世紀以降のガリアの修道院の発展。それに伴い（フランク王国の政治的統一と教会整備という新しい時代状況）、アイルランド系修道士の影は次第に薄れてゆく。

『ベネディクト会則』の普及。

(3) ドイツ

ドイツ人の使徒ボニファティウス(c.687-754)

フルダ修道院(744)、ベネディクト会則の採用。

＜参考文献＞

１．堀米庸三『正統と異端――ヨーロッパ精神の底流』中公新書。
２．グルントマン『中世異端史』創文社。
３．今野國雄『修道院』近藤出版社、『修道院――祈り・禁欲・労働の源流』岩波新書。
４．朝倉文市『修道院』講談社現代新書。
５．戸田　聡『キリスト教修道制の成立』創文社。
６．竹田文彦「古代基督教修道士と聖書」（日本基督教学会『日本の神学』30、1991 年、27-45 頁）
「シリア語版『アントニウスの生涯』――エジプト修道制とシリア原始修道制の一会合点」（日本基督教学会『日本の神学』39、2000 年、43-67 頁）
７．久松英二『祈りの心身技法――十四世紀ビザンツのアトス静寂主義』京都大学学術出版会。
８．ボンヘッファー『共に生きる生活』新教出版社。